
2024さくら道国際ネイチャーラン

掲 載 紙 面

中日新聞社

大会の顔 10回目の出場

日置和徳さん(44)=郡上市

裏方に感謝を込めて



1994年にスタートした「さくら道国際ネイチャーラン」(実行委員会主催、中日新聞社、郡上市共催)は19・21日の大会で幕を閉じる。旧国鉄バス名金線(名古屋・金沢)沿いに2千本の桜を植えた車掌佐藤良二さん(郡上市白鳥町出身)の遺志を受けて走り継いだ有数のレースは、最後のゴールを白鳥町で迎える。走り、支えた人たちの足跡をたどる。

佐藤良二さんと同じ郡上市白鳥町の出身。初参加にして市内在住で初の完走者。め、岐阜高専(本巣市)に進学後も中長距離を専門に競馬で打ち込んだ。高専卒業後、佐藤さんに入ってから数年はランニングがなかったが、いかに誘われたのをきいて、大会の顔ともいえる地元市民ランナーだ。「佐藤さんは小学校の授業でも習う地元の誇り。さくら道は中学の時に始まった一番なじみ深いマラソン大会で

ランに初めて関わったのはボランテアとしてだった。27歳で初挑戦したフルマラソンで3時間10分の好記録で完走した実績もあったが、当初はランナーとして参加する気はなかったという。「2500*は想像も付かない距離。見ているだけで大変すぎて自分が走れるわけはないと思っていた」と振り返る。

しかし、裏方として過酷なレースに挑む参加者に接するうちに、ランナーとしての意欲がもたれてきた。10年秋に新潟県で開かれた100*マラソンを完走して自信を付け、31歳にして初挑戦すると9位の好成績で見事に完走を果たした。「思い入れのある地元の大会だし、達成感は特別でした」と思い起す。その後、14年の2位を最高に、ほとんど上位で走り続けた。コロナ禍による20・22年の中止を挟んだ昨年の大会はボランテアに回った。出場枠が80人に絞られたため、他のランナーに席を譲ったのだ。ランナーとしての経験を経た日々のサポート役。周囲に支えられていたことを改めて気付いたという。

最後となる大会では、各地のエイドでボランテアたちに感謝の気持ちを伝えるつもりだ。「順位やタイムにはこだわらない。いつもは素通りに近かったけど、今回は顔見知りになった一人ひとりと話したい。一緒に走ってきたランナーたちとの連帯感もあるし、大会が最後になっても、その絆が途切れることはありません」と言い切った。(中西康)

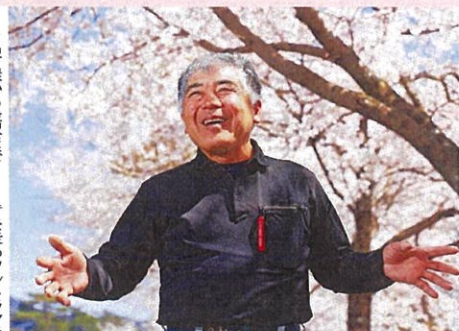
2024.4.17 中日新聞 岐阜県版 (連載_上)

幸せを。遺志継ぎ駆け抜ける

さくら道国際ネイチャーラン 30年の歴史に幕



2千本の桜を植えた旧国鉄バス車掌の佐藤良二さん(家族提供)



植樹したサクラの前で大会の歴史を振り返る小桑伊津男さん(12日、岐阜県郡上市の市合併記念公園で(原崎裕樹撮影))

「さくら道国際ネイチャーラン」の主な出来事
1994年 第1回 大会を初開催。男女13人が完走
2001年 第8回 22時間45分の大会新
08年 第15回 白鳥町発のハーフコースを新設
10年 第17回 フル、ハーフに計135人が参加
11年 第18回 東日本大震災の被災地を支援
16年 第23回 悪天候のため、大会を途中で中止
23年 第27回 コロナ禍の中止を経て4年ぶり開催

最後の「さくら道国際ネイチャーラン」は19日に名古屋市で開会式。20日午前5時、名古屋城正門前から順次スタートする。最終回のゴールは佐藤さんの故郷の郡上市白鳥町。「ハーフ」に距離を短縮してもなお100*の「さくら道」を、全国から集った30・72歳の精鋭が駆けつける。21日に白鳥町で閉会式がある。

名金線から金沢まで50*を走るフルマラソン「さくら道国際ネイチャーラン」(実行委員会主催、中日新聞社、岐阜県郡上市共催)が30年の歴史に幕を下ろす。1994年の第1回から大会を支えてきた実行委員長で会長の小桑伊津男さん(65)=郡上市=は、最後の大会となる19・21日、ランナー1000名のマラソンに最大限のサポートで臨む。大会は名金線・金沢間に2千本の桜を植えた、人々の幸せを願った旧国鉄バス車掌、佐藤良二さん(29・77年)の遺志を継ぎ、官民を挙げて計画された。佐藤さんの故郷人生を描いた映画「さくら」などで遺志を継いでいた小桑さん。佐藤さんの故郷、白鳥町(現郡上市)の体育協会会員だった縁で運営に加わった。第1回大会は車でランナーに付き添い、夜を徹してサポートした。

「ランナーのつらさはランナーにしか分からない。それでも応援している人たちが、走っている姿を見る。一緒に走っている感じがする。毎年、スタッフとして関わった。やがて大会役員を任せられ、委員長に就いた。ランナーは「昼夜、寒さや疲労、睡眠を削りながら走り続ける。その過酷な挑戦と信じている」。

最後の「さくら道国際ネイチャーラン」は19日に名古屋市で開会式。20日午前5時、名古屋城正門前から順次スタートする。最終回のゴールは佐藤さんの故郷の郡上市白鳥町。「ハーフ」に距離を短縮してもなお100*の「さくら道」を、全国から集った30・72歳の精鋭が駆けつける。21日に白鳥町で閉会式がある。

戦を、大勢のボランテアが支えてきた。コース沿いの補給所で飲食や休憩の機会を提供し、励ましの言葉をかけた。応援に感謝し、次回は支援側に戻る元ランナーも少なくなかった。「関わった人たちが一つのチームだった」。

これまでの完走者は延べ1670人。小桑さんはこれ以上走るのが難しいと判断されたランナーにリタイアを勧める役も担った。そのランナーも最後まで完走を目指し、最後まで走り続けた。「つらい仕事だったが、それでも意を決して声をかけた。ランナーの安全が最優先だった」。

大会の終了は10年以上前から議論していた。出場を希望する人はあふなかったが、運営の人手は不足気味だった。スタッフの高齢化が進み、安全管理に自信が持てなくなった。30年の節目で幕引きを決めた。ランナーとボランテア、スタッフが一括につづってきた超長距離レースの先駆け。人々のために行動した佐藤さんの遺志は、脈々と受け継がれてきた。この大会は人間関係の場だと思ってくれた。振り返る心は、花を映かせる地に広がり、花を映かせる」と信じている。

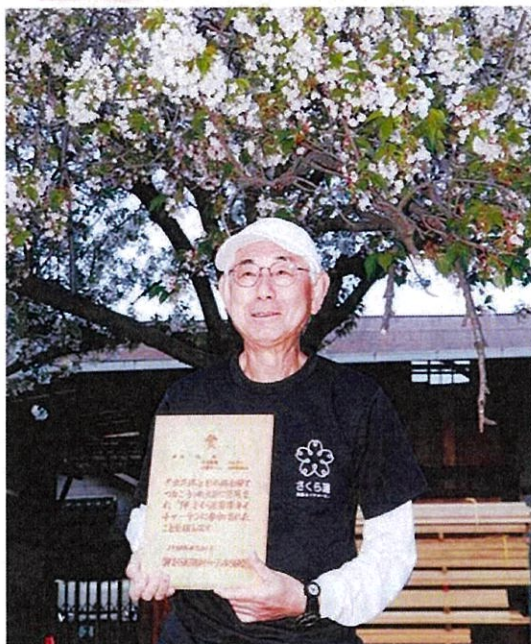
「皆勤」の実行委員長 最後までサポート

2024.4.18 朝刊一面

＊さくら道をたどって -最後のネイチャーラン-

④ 第1回大会の完走者

越田信さん(72)=名古屋市



19、21日に開かれる最後の大会出走者の中で、唯一の第1回大会(1994年)完走者。「大会終了は残念だけど、道がなくなるわけではない」。今後もしくろ道に託された思いをつないでいく。

出場25回、完走17回、エイドボランティアとしての参加も2回。全ての大会に携わってきた。「思い出かあ。何だろうね。たくさんありすぎて」。思いをはせ、笑みを浮かべる。

大会途中で悪天候中止となった大会では、荒れ狂う強風をかかんでしるぎ、風が弱まった瞬間を狙って走った。ほぼ同じ走力を持つ常連と数年にわたって、同じ場所でのしるぎを削った時期もあった。制限時間ちょうどでゴールしたことも、わずかに1分足りなかったことも。口にする思い出のひとつとつとつが、大会の歴史を感じさせる。

ランに取り組む契機は84年、フルマラソンに出場する友人に「おまえが完走したら俺も出るわ」と軽口をたたいたことだった。友人は無事完走。吐いた言葉をそんな折、新聞の片隅に

託された願いつなぐ



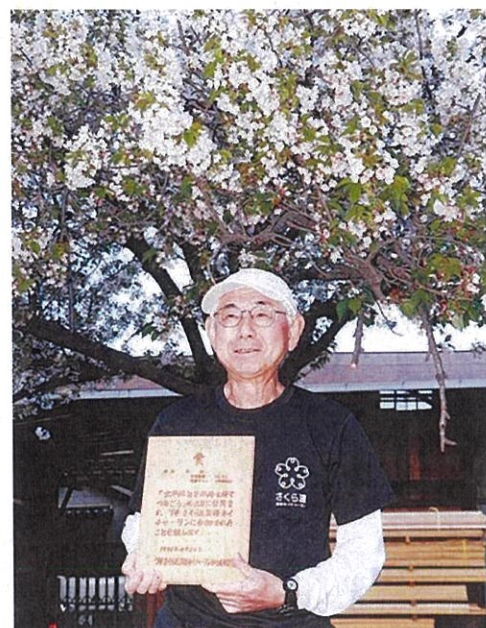
「速さを目指すより長い距離の方が向いているかもしれない」。徐々に出場大会の距離を伸ばし、93年には250キロを完走するようになっていた。

◆第1回大会の記録が刻まれた木板を手にする越田さん(名古屋瑞穂区)

◆1994年の第1回大会で出走前に記念撮影をする越田さん(本人提供)

30年の思い出と最後のゴールへ

1994年に始まり、名古屋から金沢市まで約250キロを走る「さくら道国際ネイチャラン」（実行委員会主催、中日新聞社、岐阜県郡上市共催）が、今年で幕を閉じる。名古屋瑞穂区の越田信さん（72）は第1回からランナーやボランティアとして全ての大会に参加し、19、21日に開かれる最後の大会にもエントリーしている。「さくら道を通じて知り合いも増えた。かけがえのないレース」。30年の思い出を胸に、スタートラインに立つ。（高橋信）



第1回大会の記録が刻まれた木板を手に、大会への思いを語る越田さん（名古屋瑞穂区）

さくら道国際
ネイチャラン

ランナー／ボランティア 全大会に参加 名古屋の越田さん



1994年の第1回大会でスタート前に記念撮影をする越田さん（名古屋市中区）（本人提供）

大会は毎年4月。「コースのどこかでは桜が満開」と越田さんは振り返る。旧国鉄バス名金線（名古屋―金沢）沿いに2千本の桜を植えた車掌佐藤良二さん（郡上市白鳥町）の遺志を受け継ぐのが、大会の趣旨。「佐藤さんが桜に託した平和への願いを自分の足でたどりながら感じられる」と魅力を話す。

生化学の研究機関で技術職員として働いていた越田さんは、1985年に初めてフルマラソンを完走。その後は徐々に走る距離を延

「かけがえのないレース」

ばし、93年に出場した別の大会では250キロを走り切れた。そのころ、さくら道国際ネイチャランの第1回開催を告知する新聞記事を見た。佐藤さんの偉業はラン仲間でも知られており、出場を決意。本や映画で佐藤さんの人生を勉強した。

第1回は、関門ごとに設定された制限時間との闘いだった。なんとかゴールしたものの、記録は完走者の中で下から2番目。各地に設けられたエイド（休憩所）で、ランナーに飲食物

を提供する多くのボランティアに励まされた。「サポートしてもらったの完走。走り切れてほっとした」

2011年3月11日に起きた東日本大震災の直後の大会では、被災地支援のため参加者から寄付を募って開催。越田さんも善意を寄せた。16年の大会では、開会式前日に熊本地震の最初の大きな揺れが発生し、熊本県在住の2人が不参加に。その大会は悪天候により途中で打ち切りとなったが、吹き付ける強風をかがんでしのぎ、風が弱まった瞬間を狙って走った思い出がよみがえる。

その後は走力が落ちてきたため、19年はボランティアとして参加し、エイドでランナーたちをサポートした。翌20年から3年間は新型コロナウイルス禍で大会は中止に。「いつかはおさまる。待つしかない」と再開を願い続けた。大会が23年に再開すると、ボランティアに駆け付けた。

佐藤さんの理念に共感し、「桜を見ればみんな笑顔になれる」と参加してきたが、大会は今年限りで終了が決まった。運営を支えてきたボランティアの高齢化や減少が理由で、最後の大会は郡上市白鳥町までの「ハーフ開催」となる。

越田さんは今回、ランナーに復帰して参加する。第2回大会以降、コースから外れていた同町の「藤路の桜」近くにある佐藤さんの顕彰碑の前を走るコースとなり、心を躍らせている。

ゴール後は、宿泊しながら金沢を目指して走るといふ。そして来年以降も、のんびりとさくら道を駆けたいと思っている。佐藤さんの遺志と同じように「そこに道がなくなるわけではない」からだ。

＊さくら道＊をたどって -最後のネイチャーラン-



① 大会率いた前郡上市長

日置敏明さん(80)=郡上市

仲間として見届ける

重い病気を克服した証しとして、2500*の完走を目指すランナーがいた。引きこもりの子どもに自分が挑戦する姿を見せたい、と語る父親がいた。

「『走る』を『生きる』に重ねていた。僕からすれば求道者。そういう人たちがいたことに感動した」

16年前、郡上市長に就いた。共催者の市のトップとして、大会期間は名古屋―金沢間を飛び回った。名古屋での開会式に出席し、スターターを務めた。ランナーに声をかけて励まし、各地のエイドステーション(補給所)を訪ねてボランティアに感謝を伝えた。

ランナーに向かって手を広げ、笑顔でもてなす名物のおばあちゃんがあった。ご当地グルメを用意し、にぎやかにランナーを待ち構えるグループがいた。「皆さんに会うのが楽しみだった」としみじみと語る。

2013年の第20回大会で打ち切りが議論された。「区切りにしよう」「もう少し続けよう」との両論を唱える関係者に言った。

「これだけ多くの人に喜んでもらっているんだから、続けましようよ」

名古屋―金沢間に2千本の桜を植えた元国鉄バス車掌、佐藤良二さん(1929-77年、郡上市白鳥町出身)は、日記にこう記した。「この地球の上に、天の川のような美しい花の星座をつくりたい。花を見る心が一つになって、人々が仲良く暮らせるように」。太平洋と日本海を桜で結ぶ。志半ばで病に倒れた佐藤さんの遺業の継承が、ネイチャーランの最大の目的だった。



②桜の花が舞う小径で思い出を語る日置さん＝郡上市大和町で
③記念植樹をする日置さんら＝2016年4月18日、郡上市白鳥町で

日置さんには思い返す記憶がある。小中学生のころに乗った路線バス。乗客を車内アナウンスで笑わせる車掌がいた。サービス精神が旺盛だったとの周囲の評判から「あれは佐藤さんだったのでは」と思う。

佐藤さんの桜守の物語が大会の原点であり、魅力だった。数万人が参加するマラソン大会のような経済効果は期待できなかったが、全国のランナーから愛された。「本当にかげがえのない、貴重な大会だった」

近年はボランティアの確保が難しくなり、スタッフは高齢化。安全確保への不安から、大会を長年支えた関係者に終幕を提案され、やむを得ず受け入れた。

市長退任を控えた今月上旬、あるランナーから手紙が届いた。「市長はもはやさくら道に欠かすことができない大切なメンバーです!」「大切にされたさくら道を最後まで一緒に!」

惜しまれつつ19、21日の大会で幕を閉じるネイチャーラン。市長を退いた今、仲間として顔を出そうと考えている。(山本真士)

＝終わり



名古屋―郡上・白鳥「さくら道」

最後のラン号砲

今回で最後の開催となる「さくら道国際ネイチャーラン」が、名古屋・郡上・白鳥の3市町を結ぶ「さくら道」を舞台に、20日午前5時9分、名古屋市中区で（野村和宏撮影）

ウルトラマラソン「さくら道国際ネイチャーラン」(実行委員会主催、中日新聞社、岐阜県郡上市共催)の出場ランナー100人が20日早朝、名古屋城正門前からスタートを切った。ゴールの郡上市白鳥町まで、110キロの完走を目指す。

名古屋―金沢間に2千本の桜を植えた旧国鉄バス車掌佐藤良二さん(1929〜77年)の功績をたたえ、94年に始まった大会。運営関係者の高齢化で、30年の節目の年に幕を下ろすことになった。例年は名古屋市中心部から金沢市まで250キロを2日間で走破するコースだが、最終回は佐藤さんが生

「さくら道国際ネイチャーラン」最後の大会で、名古屋城正門前をスタートするランナーたち。20日午前5時9分、名古屋市中区で（野村和宏撮影）

「さくら道」をたどって -最後のネイチャーラン-

補給所 笑顔の大輪



ランナーに激励の言葉を掛ける三井田さん
＝郡上市八幡町のいたが坂ガットパークで

旧国鉄バスを金線（名古屋―金沢）沿いに2千本の桜を植えた車掌佐藤良二さんの遺志を受け継ぐ「さくら道国際ネイチャーラン」（実行委員会主催、郡上市・中目新聞社共催）は20日、30年の歴史を締めくくる最後のレースを迎えた。多くのボランティアが沿道のエイドステーション（補給所）に立ち、110キロのコースを駆け抜けるランナーを応援した。

（華原士文 山本真士）

出場経験者、中学生…15ヵ所に300人



ランナーに声援を送る大和中の生徒たち＝郡上市大和町で

実行委によると、愛知、岐阜両県にまたがる大会には、約300人のボランティアが参加。県内は岐阜市や郡上市などに計15カ所の補給所が設けられ、早朝から食べ物や飲み物を用意してランナーを迎えた。

郡上市八幡町のいたが坂ガットパークには、2度の出走経験がある三井田明隆さん（62）＝埼玉県川口市＝がランナーをサポートしていた。人手不足のため、この地点には補給所を置かない予定だったが、実行委から協力要請を受けた三井田は、現金じゃない、気持でサポートした。

田さんは「いともたつもいらなかった。大会の約10日前、裏方としての参加が決まった。4年ぶりに開かれた前回は、変形性股関節症で出場を断念した。昨年4月に人口股関節を手術してランに復帰。今年1年、練習を積んで「来年こそ」と考えていたところで、今回は最後の大会となった。

それなら、ボランティアで。仲間も皆走っている、自分も何回も走らせてもらったから、恩返ししたかった。現金じゃない、気持でサポートした。

沿道は中学校のシンボルのヒマワリとサクラのイラストが印刷された旗を振る、ラストスパートに差し掛かるランナーに「がんばれ、あとちょっと」と大輪の笑顔で声援を送り、ハイタッチした。

3年の小島かなえさん（14）は「長く走ってつらいはずなのに、皆さん笑顔で走っている。応援しているようで、こっちも応援されている」と話した。

最後のレースとなった今大会は、佐藤良二さんの故郷の白鳥町に立つ顕彰碑に立ち寄り、ゴールが設定された。地域住民が拍手と声援で迎える中、息を切らしながら顕彰碑に触れ、大会の原動力を思い出させるランナーの姿もあった。



佐藤良二さんの顕彰碑に触れるランナー＝郡上市白鳥町で

2024.4.21 岐阜県版

「さくら道」感慨ラストラン



今回で最後となるウルトラマラソン「さくら道国際ネイチャーラン」（実行委員会主催、岐阜県郡上市、中目新聞社共催）は20日、名古屋から郡上市白鳥町までの110キロのコースで催された。74人が完走し、30年の歴史に幕を下ろした。

大会は、名古屋―金沢間に2千本の桜を植えた旧国鉄バス車掌佐藤良二さん（1929―77年）の功績をたたえ、94年に始まった。昨年までは名古屋から金沢市までの250キロを走ってきたが、今年は佐藤さんの故郷である郡上市白鳥町をゴールとした。

午前5時から順次、名古屋城正門前をスタートしたランナー1100人は、道沿いの補給所でボランティアのサポートを受けながらゴールした。

さくら道国際ネイチャーランのコース

石川県 富山県
兼六園 南砺 白川郷 御母衣 狂川
ひるがの高原（高鷲）
ゴール（白鳥）
岐阜県 大和八幡 美並 美濃 一宮
岐阜 笠松 稲沢
スタート（名古屋城）
愛知県

20km

最後の開催となったさくら道国際ネイチャーランで優勝し、感慨あふれる表彰を受けた。20日午後2時27分、岐阜県郡上市白鳥振興事務所で（隈崎樹撮影）

ゴールを目指した。長良川沿いを北上し、郡上市白鳥町の佐藤さんの顕彰碑に立ち寄った後、白鳥振興事務所で次々にゴールテープを切った。

宮城県栗原市の医師早坂研さん（47）が、9時間22分で2年連続の優勝を果たした。「運営の方々がこれだけ温かい大会はほかになかった。皆さんに感謝したい。終わってしまうのが寂しい」と話した。

21日には、郡上市白鳥町で記念植樹や閉会式があった。

4月に30年の歴史を閉じた「さくら道国際ネイチャラン」(実行委員会主催、郡上市・中日新聞社共催)でランナー、本部スタッフ、ボランティアとして関わった小学校事務職員佐藤健治さん(61)「郡上市和良町」の講演会が18日、同市白鳥町の市図書館本館で開かれた。

(中西康)

私のさくら道 本当の完結

佐藤さんは、勤務先の同僚の誘いで1998年にエイト(補給所のボランティアスタッフ)に加わり、2009年まで毎年参加した。10年にランナーとして初挑戦したが途中でリタイア。11年に初完走を果たし、12年も完走した。13年からは仕事の都合でランナーとしての参加を断念したが、本部スタッフとして毎年運営に携わった。最後の大会はランナーとしても参加し、12年ぶりに完走した。

走者、スタッフ、ボランティア経験

後藤さん、白鳥で感謝の講演

最後に「多くの人に支えられ、走ることを通じて人生を豊かにできた。今日が私のさくら道の本当の完結」と述べ、エイトのスタッフに感謝の言葉を述べた。会場には3回の完走証やさまざまな場面のパネル写真、応援の横断幕、勤務先の児童による寄せ書きなども並べられ、訪れた人が興味深げに見ていた。



2024.5.19 岐阜県版

名古屋から金沢までの250キロを走る。そんな超人的なウルトラマラソン「さくら道国際ネイチャラン」が19、21日、名古屋・郡上のハーフ110キロのレースを催し、30年の歴史に幕を下ろした。花を見て人々が喜び、心が一つになることを願って名古屋―金沢に桜を植えた佐藤良二さん(1929―77年)の物語が原点であり、他の大会との違いだった。世界のウルトラマラソン10傑として海

せせらぎ

ラストラン

外の書籍に載ったこともあった。夜を徹して補給所に立つボランティア。安全管理でコースを走り回るスタッフ。サポートに感謝を伝えながら走るランナー。関わる全ての人に、黙々と桜を植えた佐藤さんのハートが宿っていた。見えないいたすきをふないでいた。大きな事故がなく、続けられたことと自身が奇跡。さくら道ランの物語もまた、永遠に色あせない。(郡上八幡通信局・山本真士)

2024.4.23 岐阜県内各地域版

中日春秋 岐阜県白鳥町(現郡上市)に生まれ「奥美濃の桜守」といわれた佐藤良二さんの生涯は映画にもなった▼かつて名古屋から白鳥を経て金沢まで結んだ国鉄バス名金線の車掌。病で早世するまで自費で路線沿いに桜の苗木約2千本を植えた▼始めたのは、白鳥の北の飛驒の山あいに昭和35年に完成した御母衣ダムのほとりで、ダムに沈んだ集落から移された桜が花を咲かせたことに感動したため。花は、電源開発のために故郷を捨てざるを得なかった住民を慰めた。山村の悲しみがあつたから、奥美濃の桜守も生まれた▼佐藤さんを称え名古屋から金沢まで250キロを走るウルトラマラソン「さくら道国際ネイチャラン」が先日、30年の歴史に幕を下ろした。最後の大会は名古屋をスタートし、佐藤さんの故郷、白鳥がゴール▼白鳥などの住民がボランティアで運営を支えてきたが、高齢化し人手確保が困難になったことが閉幕の理由という。先に民間組織が、人口減少が進んで自治体運営がたちゆかなくなる「消滅」の可能性があるともみられた744市町村を公表したが、郡上市も入っている。御母衣ダムの悲しみもあつた昭和より、日本の山里は苦しくなった感がある▼佐藤さんは「花を見る心がひとつになって、人々が仲よく暮らせるように」と願っていた。それをこれからも続けるには何が必要か。試行錯誤を続けるほかない。 2024.4.27

2024.4.27 朝刊一面

筆洗 岐阜県白鳥町(現郡上市)に生まれ「奥美濃の桜守」といわれた佐藤良二さんの生涯は映画にもなった▼かつて名古屋から白鳥を経て金沢まで結んだ国鉄バス名金線の車掌。病で早世するまで自費で路線沿いに桜の苗木約2千本を植えた▼始めたのは、白鳥の北の飛驒の山あいに昭和35年に完成した御母衣ダムのほとりで、ダムに沈んだ集落から移された桜が花を咲かせたことに感動したため。花は、電源開発のために故郷を捨てざるを得なかった住民を慰めた。山村の悲しみがあつたから、奥美濃の桜守も生まれた▼佐藤さんを称え名古屋から金沢まで250キロを走るウルトラマラソン「さくら道国際ネイチャラン」が先日、30年の歴史に幕を下ろした。最後の大会は名古屋をスタートし、佐藤さんの故郷、白鳥がゴール▼白鳥などの住民がボランティアで運営を支えてきたが、高齢化し人手確保が困難になったことが閉幕の理由という。先に民間組織が、人口減少が進んで自治体運営がたちゆかなくなる「消滅」の可能性があるともみられた744市町村を公表したが、郡上市も入っている。御母衣ダムの悲しみもあつた昭和より、日本の山里は苦しくなった感がある▼佐藤さんは「花を見る心がひとつになって、人々が仲よく暮らせるように」と願っていた。それをこれからも続けるには何が必要か。試行錯誤を続けるほかない。 2024.4.27

2024.4.27 東京新聞一面

